

# 説経「をぐり」訓釈(上)

— 小栗・毒殺されるまで

はしがき

これまでの三回の連載で、説経「さんせう太夫」の全容をほぼ詳細に辿りえたと思う。そして、その一、二の異伝とも思える「お岩木様一代記」や「岩木山一代記」についても対比的に全容紹介し、こうした語り物特有の口承口頭上の変容相についても広く示唆を与えておいた。辞書的意味あいながら、語りあるいは芸能としての説経のごくごく一般的な変遷史についても概観し、説経語りのもつ意味あいやその構造あるいは、その形式、形態などといったものの基本的理解に資する意味で、予備的知識めいたものも様々に提供しておいた。一応これだけのことを用意したからには、ここからいわゆる貴種流離譚として「さんせう太夫」の語りの構造の本論に入ること

も念頭においておくべき説経をもう一つここで紹介しておきたい。あの説経「をぐり」である。なぜなら、「さんせう太夫」とこの「をぐり」を含めてそれに「刈萱」「信徳丸」などを加え、いわゆる五説経と称されるもののうち、この「をぐり」と「さんせう太夫」の物語りは、内容的にも様式的にもいわば、対極にある作品と思われるからである。「をぐり」は数ある説経の中でも最もダイナミックでヴァラエティにとんだ語りものの代表格とみなしうるものだが、それに比して、これまで題材としてきた「さんせう太夫」は、鷗外が少年少女向けにある種母恋い物としてリメイクしたように、荒唐無稽さの少ないいく分か単純な形の貴種流離譚の最たるものといえる作品かもしれない。すなわち、この「さんせう太夫」の物語りにはいわば説経語りメロドラマに特有の転生譚

大内 建彦

的色彩がきわめて薄い。例えば、足萎えた厨子王が土車に乗せられて天王寺詣りをし、その鳥居にすがつて「エイヤツ」と踏ん張り両足立ちするところなどに、そうした変身譚の要素の片鱗を見てとることができるかも知れないが、一方の「をぐり」は主人公小栗自身が一旦毒殺されながらも死から復活蘇生するという筋立てからもわかるように、厨子王の物語りとはいわば対極にあるような、数奇な運命と数々の因果に弄ばれる文字どおり波瀾万丈の変幻に富んだ転生譚というものである。

この「をぐり」の物語りを「陰惨な奇蹟劇」と呼んだのは折口信夫だが、全くその如くりアルとアンリアル、エロスとタナトス、エロティシズムとグロテスク、メタフアーとアレゴリーといったものが複雑に多声的に交叉重層する語りの世界を現出してあまりある。五説経のうちでも最も変化にとんだ最大の雄篇であるこの「をぐり」の物語りをかいつまんで粗筋立てることはきわめて困難だが、ごくごく簡略に述べるところである。

二条の大納言兼家には世継がなく、鞍馬の毘沙門の申し子として男子・小栗を得る。不調（淫乱の意）なる小栗は親のすすめる妻をことごとく嫌い、美女に現じたみぞろが池の大蛇と契つて勘当され、常陸国へと流罪となる。旅商人後藤左衛門から武蔵相模の郡代横山殿の一人

娘、日光山の申し子という照手姫の美人ぶりを聞いた小栗は、恋文で姫の心を動かすや、横山一門の了承を得ずして、強引に婿入りする。横山一門は小栗の無礼を憎んで、小栗を人食い馬の鬼鹿毛の餌食にしようと企むが、小栗は馬ぼめの呪文を唱えて見事にこれ乗り越え（あたかも先のみぞろが池の大蛇が変じた雌馬ともみえる点に要注意）。さらに横山の三男三郎の奸策で、酒宴に招かれた小栗は十人の家臣とともに毒殺される。横山は照手姫も相模川に沈めさせるが、鬼王兄弟はこれを助け、照手をのせた牢輿はゆきとせが浦に漂着する。村君の太夫はこれを哀れんで助け養うが、その妻が夫の留守中に虐待の上、人買に売ってしまう。さらに転々と売りとばされて、照手は美濃青墓の万屋の長に買いとられる。しかし夫に貞節を尽くして遊女勤めを拒み、下の水仕女となつてつらい労役につく。

一方、冥途に赴いた小栗は、家臣たちの忠誠に感じいった閻魔大王の計らいで蘇生し、藤沢道場の上人に託される。藤沢の上人は、熊野本宮のお湯に入れよという胸札に添えられた閻魔大王自筆の判をみて、餓鬼阿弥姿の小栗を土車に乗せ、供養に引けと自らも書き添えて土車を引いてやる。その後も人々の情けで代る代る引きつがれて、青墓の万屋の前に着く。照手もこれが小栗の変わ

り果てた姿とも知らず、主人に五日の暇をもらい、夫の供養と大津関寺まで引いてゆき、己が名を胸札に書き添えて戻つてゆく。やがて熊野の薬湯でもとの姿に戻つた小栗は都のわが家を山伏姿で訪れるが、父兼家は強弓で試し、それを見事受けとめた小栗を嫡男と認める。父と参内し畿内五か国に添えて美濃国を賜わる。美濃国に所知入りした小栗は水仕女を尋ね、はからずも照手と喜びの対面を果たす。照手の乞いに免じて横山は許し、三郎はふし漬け（簀巻きにして水中に沈める）に誅す。死後、小栗は美濃墨俣すまのぼりの正八幡荒人神として、照手は結ぶの神として祀られる。

以上のごとくだが、兵藤裕己が折口信夫や石田英一郎の先行研究に依拠して興味深く示唆するように、深泥ヶ池の大蛇は異形の馬・鬼鹿毛へと転生したものでろうか。蛇と竜馬の深い関わりは広く民俗事象への視野を提供してくれよう。あるいは又、柳田国男や角川源義の論にもとづいて、この語りの生成に潜む歴史的問題の地平を切り開いてみせるように、例えば、関東小野姓の牧場管理者としての横山氏、日光山縁起に語られる太陽神あるいは馬頭観音、大蛇などの伝承と関わり深い小野氏、さらに本貫近江・小野氏へと、各地を漂住する古代の雄族・小野氏の歴史的動静には、この語りの発生源にかかわる

興味深い問題が匿されているよう（『輪廻転生 別冊太陽』九二年四月、所収）。そして、又、いわゆる貴種流離譚の形式に則りながら、都を中核に常陸・相模・武蔵などの東国から東海道をはるばる上つて美濃・熊野をおおう広大な語りの劇的空間は、その裡に時衆・修験者・熊野比丘尼あるいは巫女といった伝承荷担者の漂泊・移動空間とも深いつながりを蔵しているよう。さらには又、「天よりも降り人の子孫」たる小栗の住居がしばしば「御所」、「黒木の御所」などと擬されており、小栗は都から配流された東国の雄として平将門像的なものが重ね合わされていると見えなくもなく、一方の照手にしても、日光山の申し子としてそこに太陽女神的化身、つまりアマテラスの変容相を読みとりうるとすれば、昨今流行のタイムにならつて、中・近世神話とでも形容しうる性格を孕みもっているともいえる（川村二郎『語り物の宇宙』）。

このように説経「をぐり」の全体的イメージとその時空は、どれをとつても「さんせう太夫」と対照的でさえあるう。すべての説経はいわば、この二つの対極的な語りの振幅の中で、様々に固有の姿を浮上させつつおさまっているといつてよく、その意味では非ともこの「をぐり」を紹介しておきたいと思つたのである。

「さんせう太夫」同様、以下その「をぐり」を丁寧な口語訳を試みたものである。ところで、あの「さんせう太夫」では、コトバ・フシ・ツメなど曲節的な注記がくり返し全体にわたって明記されていたが、この「をぐり」ではそうしたものは一切見えない。このような点に關して信多純一は、今日残されているこの「をぐり」の語り物は操り人形の台本的なものではなく、叙述内容上からいってもいわゆる草子（中世・近世の読み物で絵を主とした小説）の類いであると見なしている（信多純

申し子

そもそもこの物語の由来を詳しく辿ってみると、国を申せば美濃国安八郡の墨俣、たるいおなことの、御神体は正八幡である。この靈威ある神の御本地の姿を詳しくご披露したいが、この神もかつて一時は人間でいらつしやった。ただの人間としての本来の姿を詳しくご披露すると、その頃都には、一の大<sup>\*2</sup>臣、二の大<sup>\*2</sup>臣、三に相模の左大臣、四位の少将、五位の藏人、七に滝口の衛府の長、八条殿、それから一条殿や二乗殿、近衛閑白、花山院などなど三十六人の公家・殿上人がいらつしやった。公家・殿上人の中で、二条の大納言とは私のことだ。

\*1 「平」、〔新〕、〔岩〕ともに未詳とする。

\*2 一の大<sup>\*</sup>臣は左大臣だが以下、三に相模、四に少将と語呂合わせがある。「六」は欠くが説経等の語り物にはこの種の遊び表現にしばしば出会う。

一・阪口弘之校注『古浄瑠璃 説経集』解説。従って、語り物と読み物との間でゆれる微妙な問題もここには介在している。こうした諸問題に鋭くアプローチすべく、まずはストーリーを精細にたどってみよう。テキストは『説経節』（東洋文庫・平凡社）、『説経集』（新潮日本古典集成・新潮社）、『古浄瑠璃 説経集』（新日本古典文学大系・岩波書店）の三点によったが、注等ではこれら三書を上から〔平〕、〔新〕、〔岩〕と略して表記した。

名は兼家という。奥方は常陸の源氏の家系、(夫婦は)家柄も地位も高いけれど、男子にも女子にも跡継ぎに恵まれなかったので、鞍馬の毘沙門天に参籠になって、申し子をお祈りなさった。(参籠の)日の満ちる最後の夜の夢中のご示現に、(ひと枝に)実が三つ一緒になった梨ありの実を授かった。最上の目出た事とあつて、(さつそく)山海の珍味に、土地の果物を調達して、お喜びになることこの上ない。

御台所(奥方)は、教\*1へけむちくあらたかに、七月つきの煩い、九月つきの苦しみ、まさに十月つきの臨月に無事出産なされた。女房たちは馳せ参じ、介抱申し抱き取り、「男子か女子か」と口々にいう。玉を磨き瑠璃を延べたようなかわいひ若君でいらっしゃる。(女房たちは)「あら何と目出度いこと、(将来は)須達のように長者となつて、富貴幸福をわがものとなさいますように」と、産湯を使わせなさる。肩の上に鳳凰\*2がとまるように、手の内の玉のような愛児の前途のご多幸をと、桑の木よもぎの弓と蓬の矢で、「天地和合」と声を発して射、お祓いをする。

屋敷に久しく仕えている翁の太夫が参上して、「この若君にお名前をつけて参らそう。まことに毘沙門の夢のお告げで、三つ一緒にありなつた梨の実を賜つたのだから、梨の実に因

\*1 「新」は「教へけむ慈救」ととり、「不動明王が教えた願いごとがかなう呪文か」とする。

〔岩〕は「教へ験、値遇」と解し、「夢想のしるし、不思議な因縁」とする。

\*2 「岩」は、「あひしの玉」は不詳とする。「新」は、「愛しの玉」と「玉のような愛児」と一応解するが未詳。ともあれ、小栗誕生の祥瑞瑞兆現象とその多幸を祈つての何らかの予祝儀礼的なものの説明らしい。

んで、お名前をば有若殿」と、み名を奉る。この有若殿には乳母が六人、その他の乳母も六人と、つごう十二人の者がお預りし、抱き上げて、大事に養育申し上げる。

年月の経つのは早いもので、二、三年はあつという間に過ぎて、はや七歳におなりになる。七歳の時に、父の兼家殿は、有若に師恩に浴さしめようと、東山（のある寺）に学問のために上らせになるが、なにしろ鞍馬の申し子のことでもあるので、賢智に富むことかくのごとく、一字を学べば二字、二字を学べば四字、百字は千字と解悟なさるので、寺一番の学者として聞えていらつしやる。

あつという間に時も過ぎ、お齡を重ねて十八歳におなりになる。父兼家殿は有若を東山より願つて下山させ、元服・仕官させようとなされたが、（父の）氏も位も高いので、親代りの烏帽子親として頼むべき人もないということで、そこで石清水八幡宮の正八幡の神前で、酒器一揃（二本）取り出して、その口を雌雄一对の蝶形紙で包み飾り、そうしてお名前を常陸小栗殿と命名なさる。

御台所はことのほか喜ばれ「そうとなれば（立派に成人したので）小栗に御台を迎え取らせよう」と、御台所をお迎えなさるが、小栗はどうも不調（色好み淫乱）の人で、何かと（氣むずかしく）妻の選り好みをなされる。背の高い人を迎えれば、深山木（みやまぎ）の相だと送り返される。背の低い人を迎えれば、人の身の丈にも足らぬと送り返される。髪の毛の長い人を迎えれば、長虫の蛇の相だと送り返される。顔の赤い人を迎えれば、赤鬼の相だと送り返される。色の白い人を迎えれば、雪女を見れば興ざめすると送り返される。色の黒い人を迎えれば、身分の低い下衆女（げすめ）の相だと送り返される。送つては又迎え、迎えては又送り、

（その繰り返しで）小栗十八歳の二月より二十一歳の秋までに、都合御台の人数は、実に七十二人にも上ったとか。

小栗殿には、とうとうきまった御台所がいらずしやらないので、ある日の雨中の所在なさに、さて私は鞍馬の申し子と聞いている、鞍馬に参つて、きまった妻を是非乞ひ祈願したいと思つて、二条の御所を出て立つて、市原野辺のあたりで、中国伝来の竹製の横笛を取り出して、八つの吹口をわずかに湿らし、年上男が若い娘を恋ふる音曲、唐<sup>\*</sup>とらでん、舞とらでん、獅子とらでんという音曲を、一時間ばかり奏で遊んだ。

深泥池の大蛇はこの笛の音を聞いて、何と面白い笛の音よ、この笛を奏する男を一目拝みたいものと思いつつ、十六丈（四メートル）の大蛇は二十丈にも伸びあがつて、小栗殿を拝顔し、何ときれいな男よ、あの男と一夜夫婦の交わりをしたいと思いつつ、（大蛇は）年の頃は十六、七の美しい姫に変身して、鞍馬の本堂の一番下の階段に、わけありげな顔つきで坐していらつしやる。

小栗はこの様をご覧になって、これこそ鞍馬のご利益と、玉のみ輿<sup>こし</sup>にお乗せして、二条の屋敷へとお連れなさつて、山海の珍味にその土地の菓物を調達して（お祝いし）、お喜びはこの上もない。しかし、「好事不出門、悪事行千里」（悪いことはすぐさま知れわたるという諺）、「囊中の錐」（悪事はたちまち露見するという比喻）、その諺のとおり、（口さがない）都の子供たちがこのことを漏れ聞いて、二条の屋敷の小栗と、深泥池の大蛇とが

\* 「団乱旋」で、唐伝来の舞楽といったものか、あるいは架空の曲か。

夜な夜な通い、夫婦の交わりをかわしているとの風聞である。

父兼家殿はこのことをお聞きになって、「いかにわが子の小栗であっても、心の淫<sup>みだ</sup>らな者は、都での安住は許されまい。沓岐・対馬へでも島流ししよう」との仰せである。御台はこのことをお聞きになって、「沓岐・対馬などへとお流しなさったら、再び会うことなど至難のこと。私の領地は常陸にあります。どうか常陸の国へとお流しなさって下さいよ」。兼家もまことにそうと思われて、母の所領をつけて、常陸の東条・玉造の御所の流人となられたのであった。

常陸三ヶ莊（佐竹・東条・玉造の三庄か？）の侍ども、あれこれと評議し、「あの小栗という人は、（申し子として）天より下った人で、その子孫であるから、上の京都に変わらず、この奥つ方の都でも」と大切にお仕えし、そのうち御役職をおつけする。（すなわち）小栗の判官（検非遺使<sup>けびいし</sup>の尉<sup>じょう</sup>）有年判と侍大将にお立て申す。夜番・当番の警護も厳しくて、毎日の御番は、八十三騎にものぼるといふ。

あるお目出度い折に、どこの誰とも知れぬ旅商人一人が参り「何か紙や反物の御用はないか？ 紅や白粉<sup>おしろい</sup>、畳紙、香の類いは、沈<sup>じん</sup>、麝香<sup>じやくかう</sup>、三種の練香、蠟茶<sup>ろうちや</sup>（お茶系の練香）等々、沈香の御用はないか」などと売りつけている。小栗はこれを聞きつけて、「商人の背に負うものは何か」と聞く。

後藤左衛門はこれを受けて「はい、さようでございますね。唐の葉が千八種、日本の葉が千八種、二千十六種とは申しますが、そのうち千種くらいを背負って歩きますので、俗に千駄櫃と総称します」。小栗はこのことを聞いて、「それほどの葉の数々を売って歩いて



いるのなら、巡らない国など決してあるまい。どれだけの国を巡った」と、お尋ねになる。後藤左衛門これを受けて、「そうでございますね、鬼界、高麗、唐へは二回渡りました。日本廻国は三度です」と申す。小栗はこのことを聞いてまず、「お前の実名をいえ」とおっしゃる。(後藤)「高麗ではかめがへ<sup>\*</sup>の後藤、都では三条室町の後藤、相模の後藤などと申しております。後藤姓のついた者は三人しかございません」と、そのまま事実を申します。

小栗はこのことを聞いて、「姿なりは下衆だが、心は明朗な奴のようだ。若侍どもよ、酒を飲ませてやれ」とのお言いつけである。お酌に立った一人の若侍が小声でささやいていう、「後藤左衛門よ、ご主人様には、まだ奥方がおられない。どこかに眉目麗わしい方を知っていたら仲人をせよ。よいご鼻<sup>ひいき</sup>筋ができるぞ」とのお尋ねである。

後藤左衛門「(そんな人は)知らないと言え、廻国の商人としては誠にふがない。武蔵・相模、両国の郡代、横山殿は男の子は五人おられますが、下に姫君がおられません。下野国の日光山に登り、照る日・照る月に申し子を祈ったところ、なにしろ(誕生したのが)六番目の末娘ということで、御名を照手姫と申されました。

この照手姫の、姿顔だちの上品なこと、姿といえは春の花、顔だちを見れば秋の月、十本の指も瑠璃を引き延べたようで、赤い唇も潤って鮮やかで、ほほ笑む白い歯はまことに愛らしい。翡翠のようなつややかな黒髪は長くて、青黒色の立てかけた板に香墨ですった

\*〔平〕、〔新〕、〔岩〕とも未詳とする。

墨をさつと一気に流したようである。太液池<sup>\*1</sup>の蓮の花の優美さに比べると、未央宮の柳はまだごつごつしています。池の蓮が朝露を含んで、ちよつと傾いた風情も美しいが、それも姫には全く及ぶところではありません。ああこの姫こそ、この小栗の殿様に全くうつつけの奥方でございますう」と、言葉をきわめて飾りたてて、弁舌さわやかに申し上げる。

小栗は聞いただけで、ひそかにまだ見ぬ恋にあこがれて、「仲人をせよ、商人」と黄金十兩を取り出して、「これは当座のご祝儀だ。このことがめでたく成就したあかつきには、その勲功に対しては望み次第」と約束なさる。後藤左衛門はこれを聞き、「位の高い貴人の仲人をするなどとは僭越しごくだが、（それでは）ほんの一筆で結構ですが、お書きになって下さい」と、（勧められ）紙と硯で恋文をしたためる。

小栗は大変お喜びになり、紅梅檀紙に雪（白）の薄様の紙を一重ね引きのぼして和らげ、逢坂山の鹿の毛を穂にし軸に蒔絵のある筆に、紺青の墨をたつぷりと含ませ書院<sup>\*2</sup>の窓の明かりの下で、思い浮かぶ言の葉をいかにも上手にお書きになって、山形<sup>\*3</sup>の形状ではないけれど、未だ逢瀬を待つ恋のことなので、松皮様に結んで、「さあ、では後藤左衛門、手紙を頼む」との仰せである。

\*1 長恨歌中の女の顔面や眉の優美さをたたえる詞句。

\*2 「新」は「初寒」とし、秋寒の頃をさすとしている。

\*3 恋文の結び方として説経等に頻出する。

後藤左衛門、「承知しました」と、葛籠つづらの掛子に急いで入れ、連尺の縄紐をつかんで肩にかけ、天を走る地を潜るとばかり、急ぐほどに程なく、横山の居館に駆けつける。

その身は落縁に腰をかけ、葛籠の掛子に、種々の薬を沢山に積み込んで、乾いぬい（西北）の部屋にさしかかり、「何か紙や反物の御用はないか？ 紅べにや白粉おしろい、畳紙、香の類は沈じん麝香じやかう、三種の練香、蠟茶等々、沈香の御用はないか？」などと売りつける。

冷泉殿に侍従殿、丹後の局はなに阿香の御前など、（女房たち）七、八人がいらつしやつて、「あら珍しい商人だこと。どこからいらつしやつたか。何か珍しい品物はないか」と、声をかけられる。

後藤左衛門これを聞き、「何でも珍らしい商い物はございますが、ここより遠く常陸国の小栗殿の裏道の交差点で、いかにも上手にしたためた落とし文一通を拾い持っておりますが、これまで沢山の手紙を拝見してまいりました中でも、このような表書きの見事な手紙はこれまでで初めてです。ところで皆様御婦人方、（この文は）古今・万葉・朗詠集などの歌の心で綴ったものですが、お気に召せば、御手本にでもなされ、気に入らなければ引き破つて、庭にでも捨て、笑いの種とでもなさいよ」と偽つて、その手紙をさしあげる。女房たちは仕組まれた偽りの文とはご存知なくて、さつと広げて拝見になる。「あら（私と一緒に）面白く（遊びましょうと）書かれてある。『上にあるは月か星か、中は花、

\* 「貴女は雲の上のようなお人、月か星か手に届かぬ、その艶あでやかな容色は、中空に浮かぶ花のよう、私はその下で貴女ゆえにあこがれて涙は雨霞と降るばかり」といった意。

下には雨霰』と書かれてゐるのは、これは単なる狂気、狂乱の者にちがいない。訳のわからぬことを書きつけていることよ」と、皆でどつとお笑いになる。七重八重九重と奥の幔幕（深窓）の内に居る、照手の姫は（この騒ぎを）お聞きになつて、中の間までそつとお出でになつて、「ねえ、どうしたのおまえたち、何を笑つてゐるのですか。面白いことがあるのなら、私にも教えてちょうだい」との仰せである。女房たちはこれを聞いて、「何も特別に面白いこともございせんが、ここにゐる商人が、常陸国の小栗殿の裏通りの交差点で、いかにも上手にしたためた、落とし文を一通、拾つたと申しますから、拾つた場所心惹かれて、広げて拝見いたしました、何とも意味が通りません。ほらこれを御覧下さい」と、元のままに押したたんで、扇子に乘せて、照手の姫にお渡しする。

照手はこれを御覧になつて、まず表書きをお褒めになる。「印度では大聖文殊、中国の唐では善導和尚、わが国では弘法大師の御筆跡をお習ひになつたか、筆遣ひの立派なこと。書の技法や書体の美しいこと。墨の香気や筆勢の氣品は言葉に尽しがたいほどです。この文の主が誰とも知りませんが、この人は文だけで人を死ぬほどに魅了させますよ」と、まず表書きをお褒めになる。「ねえ、おまえたち、百のことを知つていても、一つのことを知らないのは、知つていても知らないのと同じことです。言い争つてはいけません。知らないのならそこでじっくりお聞きなさい。さてこの文の意味を判り易く読んで聞かせましょう」。文に結ばれた紙捻を解いて、さつと広げて拝見なさる。

「まず初めの書き出しに、『細谷川の丸木橋』と書かれたのは、この文（踏）途中で止めずに最後まで読み通して、返り事せよと読みます。『軒の忍』と書かれてゐるのは、

\* 道中の暮れ時には、しばらく待ち遠しいと意味を判じます。『野中の清水』と書かれているのは、このことは人に知らすな、心のうちで一人済（澄）ませと読みます。『沖こぐ舟』と書かれているのは、恋ひ（漕ぎ）焦がれるので、急いで着けと判じましょう。『岸打つ波』と書かれてあるのは、乱れて物思いをするだろう。『塩屋の煙』と書かれてあるのは、さあ浦風よ吹くならば、一夜は靡（な）けと読みましょう。『尺ない帯』（丈の足りない帯）と書かれてあるのは、いつかこの恋が成就して、結び合（会）おうと読みましょう。『根笹にあられ』と書かれてあるのは、触らば落ちよ（口説かれて相手のものになる）と読めます。『二本薄』と書かれてあるのは、いつかこの恋が穂となって出て、乱れ合おうと読みましょう。『三つのお山』と書かれてあるのは、祈願したら思いどおりに叶え（鼎）と読みます。『羽ない鳥に弦ない弓』と書かれてあるのは、まあ何とこの恋を思いそめて、立つ（飛び立つ）にも立てず、居（射）るにも居られないと判じましょう。さあこれ以上先まで読むのはよしでしょう。ここに一首の和歌の奥書きがあります。『恋ゆる人は常陸の国の小栗なり 恋ひられ者は照手なりけり』。あら見たくもない、こんな手紙なんて」と、その場で二つ三つに引き破り、御簾の外へぽんと捨てて、簾中深くにそっと引きこもられた。

女房たちはこの有様をご覧になって、「だから言わぬことじゃない。ここにいる商人が大事なことを人に頼まれ、手紙の使いをするのよ。どなたか警固の者はいませんか。あれ

\* 〔岩〕、〔平〕は不詳とする。

を処置しなさい」との仰せである。後藤左衛門はこれを聞いて、そら、やってしまった、とは思ったけれども、夫の心と内裏の柱は大きくて太くあれ（男は大胆な上に大胆であれ）、という喩えの諺があるように、うまくいくかどうかかわからないが脅してみようと心中思いながら、連尺つかんで白州に投げ、その身体を広縁の上に踊り上がらせて、板踏み鳴らして、「観仏三昧海経」の説くところを挙げて脅しにかかった。

「のうのう、どうか照手の姫。今の文をばなせお破りになったのか。印度では大聖文殊、中国の唐では善導和尚、我が国は弘法大師の御筆は、根源の筆跡であるので、一字破れば仏一体、二字破れば仏二体を破るに等しい。だから今その手紙をお破りになっただけではなく、弘法大師の二十本の指を食い裂き引きちぎったも同然です。ああ何と恐ろしい照手の姫の死後の業報はどういう結果になるでしょう」と、板踏み鳴らし、「観仏三昧海経」引用して脅したのは、これこそあの有名な檀特山<sup>\*</sup>での釈迦仏の御説法とは申しますが、この後藤の言葉にどのようにして勝てるだろう。

照手はこのことを聞いて、悄然とされ、「武蔵・相模両国の貴人の方々から、沢山の手紙が来ましたが、これらもひきさき破り捨てましたが、それがわたしの後の業となろうとは悲しいこと。神も鏡に写してご覧下さい。知らないでしたことですからどうかお許し下さい。さてこのことが父の横山殿や兄上たちに漏れ知れて、お咎め<sup>とが</sup>があるとしても仕方ないこと。さっそく今の手紙の返事を書くことにしますよ、侍従殿」。侍従はこの言葉を

\*〔新〕、〔岩〕ともに、釈尊修業の山は耆闍崛山<sup>ぎじゃくつ</sup>で、この伝は誤りという。

受けて「そうした事情とあらば、どうぞお手紙をお書きなさいませ」と紙と硯をご用意する。

照手は格別にお思になつて、紅梅の檀紙に雪白の薄様の紙を重ね引きのばして和らげ、逢坂山の鹿の毛を穂にし軸に蒔絵のある筆で、紺青の墨をたつぷりと含ませて、書院の明りの中で、自ら思う言葉を、いかにも麗しくお書きになつて、山形様ではないけれど、未だ逢瀬を待つ恋のことなので、松皮様に引き結んで、侍従殿にとお渡しになる。

侍従殿はこの手紙を受け取つて、「さあ、どうぞ後藤左衛門。これは先のお手紙の返事ですよ」と、後藤左衛門にお渡しになる。後藤左衛門は「承知いたしました」とばかり、葛籠の掛子にさつと入れ、連雀つかんで肩にかけ、天を駆ける地を潜ると急がれたので、程もなく常陸の小栗殿の元に駆け戻つた。

小栗このことをご覧になつて、「やあ、どうだった後藤左衛門。手紙の返事はどうだ」との仰せである。後藤左衛門は、「貰つてきております」と、扇子にのせて、小栗殿にさしあげる。小栗はうけとつて、さつと急いで広げて拝見する。「『とても感興ふかく面白く拝見しました』と書かれている。『細谷川の丸木橋の下で、文（踏）落ち合ひましよう』と書かれているのは、このことは一家一門は全く知らないことで、姫一人だけが承知したらしく見える。一家一門の者が知ろうと知るまいと、姫の承諾こそ肝心だ。さつそく婿入りしよう」との相談である。

小栗一門の者たちは、「どうでしょう小栗殿、上方とはちがつて奥州では、一門が承知せぬところへ、婿には迎えられぬと申すでしょうから、今一度一門へと使者をお立てにな

つてはいかがですか。小栗はこのことを聞いて、「なに大剛の兵が、使者など必要ない」と、屈強の侍を千人選び、その中から五百人、更にそれを百人にしほり、その中から十人を選びめぐり、自分に劣らぬ、異国の魔王のような剛の者十人を召し連れて、「やあ、どうだ後藤左衛門、どうせ同じことなら道案内を」と命じられる。後藤左衛門は「承知いたしました」と、葛籠を小栗の館に預け置いて、編笠を目深に引つかぶって、先に立つて案内する。

（横山の館を遠望できる）小高い丘へと立って、「御覧下さい小栗殿。あの棟門の高い館が父横山殿の屋敷。こちらの低い棟門の館が五人の公達たちの屋敷。乾（北西）の方角の主殿造が照手の姫の局。門内にお入りになる時に、番衆どもが誰かと見咎めるようなことがあれば、いつも参る来客を知らぬのかとおっしゃれば、さして咎める者もございません。ではこれにてお暇を申します」というので、小栗は、かねてより御用意のこととして、砂金百両に絹の反物百疋、（それに）奥州産の馬を添えて、後藤左衛門に引出物を給わった。後藤左衛門は多額の引出物を給わって、喜ぶこと限りがない。

小栗以下十一人の侍どもは、横山殿の門内にお入りになる。番衆は「誰か」と咎め立てする。小栗はこれを聞いて、大の眼を怒らせて、「毎度の客人を知らぬか」と一喝すると、もはや誰も咎める者もない。十一人の侍たちは、乾（照手）の局へと直行する。

小栗殿と姫君を、物にたとえてみれば、二人は神ならば男女の縁結びの神、仏ならば愛染明王と釈迦牟尼仏、天にあれば比翼の鳥、偕老同穴の契りも浅からず。鞠・ひょうとう・

\*〔新〕、〔平〕、〔岩〕ともに未詳とする。



笛太鼓、七日七夜の管絃の宴は、言葉に言いつくせぬほど盛大華麗をきわめた。

このこと父横山殿に漏れ聞こえ、五人のご子息を御前に召され、「やあ、どうだ嫡男家継よ、乾の方の主殿造りへ初めての御来客と聞くが、お前は何か知っていることはないか」。家継はこれを聞いて「父上さえご存じなきことを私が知るはずありません」と申される。横山殿は大いに腹を立て、「一門誰も知らぬ所へ無理やり押し入って婿入りした大剛の者を、武蔵・相模七千余騎の精鋭を結集して、小栗を討ち果たせ」との詮議である。

家継はこれを聞いて、烏帽子をすっかり地につけて、涙を流して進言する。「のう、どうです父上殿、これはたとえではありませんが、鴨は寒くなつて水に入る。鶏は寒いと木に登る、人は滅びようとする時は突然以前にはみられなかつた勇猛心がわく、油火は消えゆく時こそかえつて光が増すとか、いいます。あの小栗と申す者は、天より下つた人の子孫なので、力は八十五人力、又荒馬乗りの名人なので、それに劣らぬ彼に従う十人の豪の者は、異国の魔王の如き存在です。従つて武蔵・相模七千余騎を結集して、小栗を討とうとなされても、たやすく討ちとることは不可能です。是非とも父上殿は、何もご存じないふりをして、この際、婿殿としてお取り下さい。それは何故かと申しますと、父上殿がどこかへいざ御出陣なさらんとする折には、武人としてこれ以上頼もしい味方はありませんよ、父上殿」とのお諭しきとである。

横山殿はこれを聞き、「これまで家継は小栗を存ぜぬと申したが、今はすっかり許している見えるぞ。お前を見ればまことに腹も立つ。立ち退け」との仰せである。

三男の三郎は父上の顔色をみて、「お怒りになるのはごもつともです。私に一計があります。明日、婿と舅\*1の対面ということで、乾の局へ婿見参の使いをお立てなさいまし。武勇に秀でた侍ならば、臆することなく参上するでしょう、そしてその折御酒が進んだのを見はからって、父上が、『都のご客人、何か都の芸を一つ』と、小栗にご所望下さい。それに対して小栗は、『私の芸とは、弓か鞠かはたまた料理か、それとも力業か早業か、盤の上の遊びか、何なりと早速に注文なされ』と申すでしょう。その時父上は、『私は、そうした物は好かぬので、奥州より、乗りならしめていない牧場から出したばかりの馬を、一匹飼っております。その馬でほんの一馬場乗ってみて下さい』とご所望なさい。そうすれば（小栗は）普通の馬だと思つて、引き寄せて乗ろうとするでしょう。その時、かの鬼鹿毛がいつもの人秣まぐさを与え入れたと思つて、小栗を人食い馬の秣にしてしまえば、太刀も刀もいりません、どうです父上殿」と申します。横山殿はこれを聞いて、「よくぞ考えたな、三郎、名案だ」と、乾の局へと使者が立つた。

小栗は使者に対して、「ご主人よりわざわざ御使いをいただかなくとも、私の方からお伺いしようと存じておりました。御使いを賜つて、ありがとうございます」と、肌には青地の錦をお着けになり、紅色の巻染\*2の直垂ひたれに、刈安染め風の水干かぶりものに、立派な冠物をお着けになり、十人の武人たちも、都風にいかにも品よく正装して出向かれ、幕を勢いよくつ

\*1 「岩」は「主」と、つまり主人と解している。

\*2 「刈安」はイネ科の多年草で黄色の染色材。

かみ上げて、もてなしの座敷きの様をとくと見れば、小栗を丁重にもてなすかの風情。

（小栗は）一段高い上座におすわりになる。横山八十三騎の面々も、千鳥が連なり飛ぶ形に似せて斜め打ち違えて並ばれる。御酒が五献と過ぎて後に、横山殿の仰せで、「都の客人よ、何か芸を一つ」とのご所望である。

小栗はこれに答えて、「私めの芸とは、弓か鞠か料理か、それとも力業か早業か、あるいは盤上の遊びか、早速ご注文を」とのお言葉である。横山殿は「いや私は、そのようなものは好かぬ、奥州より乗り馴らしていない牧場から出したばかりの馬を一匹飼っております。ほんの一馬場乗って見せてくださらんか」とのご所望である。

小栗はこれを聞くが早いとその座敷を勢いよくぱつと立ち、馬屋へとお移りになる。この度は異国の魔王のように、大蛇に綱を付けてあるとしても、馬とさえいうからには、一馬場くらいは乗ってみせようと思われる、馬屋の馬丁の頭をお召しになり、四十二間の馬房につながれた名馬のうちから、「あれか、これか」とお尋ねになる。

「いやあれでもなく、これでもなく」、そうではなくて、屋敷の環濠の向う八町先の茅野をさして馬丁は覚悟して御供をしてゆく。右と左と茅原を見ると、かの鬼鹿毛がいつも食み置いた、死骨・白骨・髪が算木をばらばらに散らしたごとくである。

十人の家来たちはこの様を見て、「のうどこか小栗殿、これは馬屋ではなくて、人を葬送する野辺ではないか」と口々に言う。

小栗はこれに答えて、「これは人を葬送する野辺ではない。上方とはちがつて奥州には鬼鹿毛がいると聞いているがこれだな。私が、押し入って婿入りしたことがけしからんと、

馬の秣に食わせようとするのらしい、けなげなもてなしよ、笑止千万」と、広大に開けた原野をきつとお見据えになる。あの鬼鹿毛が、いつもの人秣を入れてくれるものと心得て、前脚で地を掻き寄せ、鼻息を激しく立てる様は、雷が鳴るようであった。

小栗はそれをお聞きになつて、厩舎の様体をご覧になる。周囲四町の裡に籠め置き、堀を掘らせ、山から木を運び出す人夫が八十五人も必要なような楠柱を左右に八本、土中深くにねじ込んである。大柱の間の小柱と見えたのも、大人三人抱えほどもありそうな栗の木柱を土中深くねじ込んであつて、根からそっくり引き抜かれてはかなわぬと、横に地貫<sup>じぬき</sup>を枷<sup>かぎ</sup>のように入れてある。鉄の格子を張つて、横木を入れて固定し、四方八本の鎖で鬼鹿毛をつないである様は、まさにあの冥土の道に名高い、(人間の)無間地獄の構えとやらも、きつとこれには勝てまい。

小栗はこの様子をご覧になつて、「愚人は飛んで火に入る夏の虫、雌鹿の鳴き声に似せた猟師の鹿笛にだまされて、雄鹿が命を落とすとは、(まさにこのこと)今こそ思い知つた。小栗が奥州に下つて、妻にうつつをぬかして馬の秣になつたなどと噂が立てば、そんな都の評判こそ恥ずかしい、まさに茫然自失の態。

十人の侍たちはこれをご覧になつて、「小栗殿、どうぞあの馬にお乗りになつて下さい。あの馬が主人の小栗殿をちよつとでも食おうとしようものなら、畜生とて容赦しません。鬼鹿毛の首元に一刀ずつ報いた上で、横山一党のいる侍所へ攻め込んで、目釘が折れ抜けんばかりまでとことん戦つて、三途の川を、敵も味方にもぎやかに騒ぎながら、手を組みあつてお供をいたしますので、何の不都合がございましょう」。俺が鬼鹿毛を出そう、い

や俺が出そうと、ただ一途に覚悟をきめた十人の侍の心意氣の前にはいかなる天魔鬼神も、おそるるに足りない。

小栗はこれを聞いて、「あのような剛の馬は、力業では乗れぬ」と、十人の部下たちを厩舎の外へ押しかえし、鬼鹿毛に大事の因果を押し含める。「よう鬼鹿毛よ、汝も生あるものならば、耳振り立ててよく聞け。他の馬は普通の馬小屋につながれて、人の与える餌を食べて、そして人に従っては尊い思案をしてだよ、それから門外につながれて、お経や念仏を聴聞し、来世の安穩を心掛けるというのに、それにひきかえお前は、人秣を好む由、それは畜生の鬼のすることだ。人が生あるものなら、おまえも生あるもの。生あるものが生あるものを食うたりして、後生はどうなるのだ鬼鹿毛よ。それはそうと、今回はわたしの面目のため、ぜひひと馬場乗せてくれ。一馬場乗せてくれたら、お前の死後は、金色の御堂と寺を建て、お前の姿を漆で固め、馬頭観音として祭ってやろう。牛は大日如来の化身というではないか、鬼鹿毛よ」と話しかけられる。

この人を誰かとはお見知り申さぬが、鬼鹿毛は小栗殿の額に米という文字が三体现じ、小栗の両眼に瞳が四つあるのをしかと拝み見、前脚をぱつと折り、両眼から黄色い涙を流し、さあ、お乗りなさいと言わんばかりである。

小栗はこの様子をご覧になって、どうぞ、お乗り下さいとの意思表示か、それでは乗ろうかと思われて、馬丁の頭を呼んで、「鍵をくれ」との仰せ。頭はこれを聞いて「はい小栗殿、この馬はかつてつないでからというものの外に出ることがなかったので、鍵などあずかっていません」という。

小栗はこれを聞いて、それならば馬に、力のほど見せてくれるとばかり、鉄の格子にくらい付き、「エイ、ヤツ」とばかり引くと、錠肘金をもぎ取った。門を取つてあつちの方へ置き呪文を唱えると、馬はおとなしくなつた。馬丁の頭を呼んで、「鞍と鎧を」ともつて来させる。馬丁の頭は「承知しました」と、他の馬の金覆輪に、手綱二本を縊り合わせ、頭のもつ鞭をそえて献上する。

小栗はこれを見て、「このような剛の馬には金覆輪は合わぬと、さしあたつての曲馬芸に裸馬で乗つてみせることとし、馬の鞭のみお取りになつて、四方八方から鬼鹿毛をつないでいた鉄の鎖を一所に寄せて、「エイ、ヤツ」と引くと、鎖ははらりと切れた。これを手綱とより合わせて、まん中を轡として鬼鹿毛にがっしりと噛ませ、馬をひきたててほめられる。

「わき腹、後足の尻あたりの肉づきよく、左右の顔面は肉がそげ、耳は小さく後ろに張つて、法華經八卷二つを左右に巻きおいたかのようなのである。両眼は照る日月の如く、鼻孔は千年生きた法螺貝を二つ合わせた如くである。首から肩につづたて髪の見事さは、日本一の山菅を、本を揃えて一鎌刈つて、（それを）嵐になぶらせなびかせたよう。胴体の骨のありさまは、筑紫の丸木の上品の一張の強弓がぐいと反りかえつたかのように。尾は三重の滝の水が滔々とたぎり落ちるかのようなのである。後ろ股は唐の琵琶を逆さまにしたようにすつと伸び、盤上に二面並べた如くである。前足のありさまは、日本一の鉄で、あるべき所に関節を磨きつくり、取りつけたかのごとくである。この馬はかつてつないだままで、ここから出たことがないので、爪は厚く蹄も円く高い。ほかの馬が千里を走ると、鬼

鹿毛はそれから先だけ走るかもわからない。

このようにお褒め<sup>ほ</sup>になつて、厩から出してひと鞭びしつと打つて、堀の舟橋を注意しつつゆつくりと乗つて渡り、この馬が野を駆けるその様を、ものによくよく譬<sup>たと</sup>えてみると、竜が雲を引きつれ、手長猿が梢から梢へ自在に伝うように、若鷹が元氣に鳥小屋を出て雉を狩るように、八町の茅原をさつと走つてはすつと止まつたり、縦横無尽に試乗する。馬の性<sup>しやう</sup>もよし、十人の部下たちは、余りのうれしさに、五人ずつ二手に分かれて、両方から「やんや、やんや」の大喝采<sup>かつさい</sup>。横山配下の八十三人は、今こそ小栗の最後を見とどけると、我先にと進み出て見るも、「これは、これは」とばかり、啞然としてゐる。

三男の三郎は、小栗の乗馬の面白さに、十二段の梯子を取り出して、主殿の屋根の端に掛け、腰の扇子<sup>せんす</sup>を広げて、こちらへ、こちらへとはやし招く。小栗もこれを見て、いっそ乗るからは、梯子乗りもしてみせようと、四足を揃え、十二段の梯子をゆつくりゆつくり乗り上げて、主殿の屋根の端を行ったり来たりしつ（スピードをあげて）、真逆様に一氣に降り下る。秘伝「岩石下ろし」の術。

嫡男家継この様子をみて、「四本懸り」と注文された。蹴鞠<sup>けまり</sup>の「四本の懸り」の松の木へゆつくりと乗り上げ、降り下ろす真逆様の「岨<sup>そば</sup>伝い」の秘伝の術。障子の上に乗り上げて、骨も折らず紙も破らない、これは「沼渡し」の秘伝の術。碁盤の上ののつて、四本の足で立つといった曲乗りも、ゆつくりと優雅にお乗りになつて、その他、鞭の秘伝の妙技の数々、輪鼓<sup>\*</sup>、早行、蹴上げの鞭、悪龍、黒龍、柅檀畜類、瑪瑙の鞭。

\* 以下、秘術の数々は不明不詳のもの多し。

手綱の秘伝と称するものは、指し合い・浮き舟・浦の波・蜻蛉返り・水車・鴨の羽返し・衣被き。これらと思う鞭の秘伝、手綱の秘伝の数々を披露し尽くすと、さすがの鬼鹿毛といえども、それにも勝る判官殿に胴の骨をしつかとはさまれて、白泡を嚙んで立っている。

小栗殿は、別についてはいないがわざと、裾の塵を払うような仕草をして、三抱えもある桜の古木に馬をつなぎ、もとの座敷きにお直りになる。「のう、横山殿、あのような乗り心地の良い馬なら、五頭でも十頭でも、婿への引出物に賜りたいものです。朝夕馬の口を乗り和らげて差し上げましょう」と申されると、横山八十三騎の人々は、何も可笑しいことはないのに、一同どつと苦笑い。

馬の分別や活力が勢いづくやら、小栗殿の威勢が高まるやら、鬼鹿毛は三抱えもある桜の古木を根こそぎ引き抜き、三丈の堀を跳びこえ、武蔵野を疾走すれば、さながら小山が動きまわるよう。

横山殿はこれを見て、今は都の客人に、手を擦って懇願しなくてはとてまかなわぬと思われて、「のう、どうでしょう都のお客人。あの馬を止めて下され。あの馬が武蔵・相模両国に駆け入ったら、食われてひとりも残るまい」との仰せである。小栗はこれを聞き、そのように手に余る馬をば、飼わぬが良策といったくは思っただけで、それを言えは誰やられつきとした侍の恥辱になると思われる、小高いところに上られて、芝繫ぎという呪文

\* 以下のように漢字を当てるが、意味不詳。



をお唱えになると、雲を霞と駆け回っていた鬼鹿毛が、小栗殿の前に跳んできて、諸膝折ってつくばった。

小栗はこれを見て、「お前は乱暴がすぎるよ」と、小栗の手で既に戻され、錠・肘金をしっかりと下ろしなされたが、さてその後、小栗は照手姫を伴い、常陸国へとお戻りになつていれば、その後は目出たくあつたであらうものを。ところが又乾の局に戻られたのが、小栗の運の尽きたる次第と相成つた。

横山八十三騎の一味は一緒に集つて、あの小栗のやつを、馬で殺そうとしたが、うまくゆかず、どうしたらよからうかと思案なさるが、三男三郎は、後でどうなるかを考えないで、「のう、どうでしょう父上殿、私めが今思案している謀計はこうです。まず明日になりましたら、昨日の馬術の御ねぎらいとして、蓬萊山の飾り物を組み立て、多種の毒を集め、毒酒をつくつて、横山八十三騎の人どもの飲む酒は、初めの酒の酔いがさめる、不老不死の薬酒、小栗十一人衆に盛る酒は、ええと、烏甲うがぼと入りの猛毒酒をお盛りになれば、いかに剛の者の小栗とて、毒の酒にはよもや勝てまいよ、父上殿」と提案する。

横山殿はこれを聞き、「見事に企んだな三男よ」と、さつそく乾の局に使者がたつ。小栗殿は一度目の使いに承諾なく、二度目の使いにも御返事なし、以後お使いは六度立つ。七度目のお使いは、三男の三郎殿自らが使い。

小栗はこれに対して、「お伺いはすまいと思いましたが、三郎殿自らのお使い、何とも

\*  
〔岩〕は、末の大きい災いをいうとする。

喜ばしい限り、お伺いしましょう」と、申されたことこそ、これで小栗の運も尽きた次第。人は、運が傾きかけると、知恵は曇り才覚も消え失せて、昔からずっと今日まで、親子や兄弟や夫婦の間で、数知れず哀れなことがあった。

ああおいたわしい照手姫は、夫の所へいらっしゃって、「ねえ、どうでしょう小栗殿、昨今の世の中は、親が子を欺き、子はまた親に反抗するのが常。きのうもあの鬼鹿毛に、乗れと言われたのですから、今度も前もって用心なさらないか小栗殿。明日の蓬萊山の御見物、お止しになって下さい。さて私がお止しなさいと申しますのに、ご承知下さらぬのなら、私自らの夢物語をお聞かせしましょう。

さて、私どもの所に、七代伝わる唐の鏡がございますが、私の身の上に、吉事がある折は、表にはご神体が映り、裏には鶴と亀が舞い遊び、その間で千鳥がお酌をしています。又、自分の身の上に、凶事のある折には、その鏡の表も裏もかき曇って、裏は汗をかきました。このような鏡ですが、昨夜の夢に、天から鷺が舞い降り、宙でその鏡を三つに蹴割りました。ひとつは地獄に落ちてゆき、もう一つは微塵に碎け散り、残りのもう一つは、鷺がつかんで昇天するという夢をみました。

二度目の夢では、小栗殿が常陸国来ずつと愛用なさっている九寸五分（約三〇センチ）の鍔通しが、鍔元のはばき金の根元からずんと折れ、役にたたなくなつたのを見ました。三度目の夢には、これも小栗殿ご愛用のまだら重簾の弓も、これも鷺が舞い降りて、宙で三つに蹴折り、本筈は地獄へ落ち、中は微塵に碎け折れ、未筈の残りを、小栗殿の為に、上野が原に卒塔婆として立てたのを見ました。

また見ました夢に、小栗殿以下十一人の侍たちが、日頃の衣装に替えて、まっ白の浄衣じよういを着て、小栗殿は逆鞍を置いた葦毛の馬に乗り、逆鏡あぶみを掛けさせ、その前後に千人の僧が供養しながら、小栗殿の目印としては、幡と天蓋をなびかせて、北へ北へと進まれるのを、私は余りの悲しさに、その後を一所懸命追いかけてましたが、光をさえぎる横雲にじやまされて、見失ってしまうのを見ました。

夢に見てさえ心乱れて悲しいのに、万一、この夢が事実になったら、一体、照手はどうなるのでしょうか。明日の蓬莱山の宴の門出に、これは大そう悪い夢ではないでしょうか。どうぞ行くのをお止しになって下さい」。

小栗はこれを聞き、女が悪い夢を見たとしても、れっきとした侍が出てくれと言っている所へ、参らぬわけにはいかないとお思いになって、そうはいつでも気には懸るとみえて、呪まじないに直垂ひたたれの裾をちよつと結び上げ、小栗は「夢違えの文」をこのように口ずさんだ。

「唐国やそのの矢先に鳴く鹿も、違夢ちがあればゆるされずる」と。こう詠じて、小栗殿は、膚には青地の錦をお着けになり紅色の巻染の直垂に、刈安染め風の水干に、わざと冠物はお着けにならないで、他の十人の武者たちも、都風に上品にご出立なさって、（横山殿の主殿の）幕をさつと投げ上げて、（初見参の時と）同じ座敷位置にお着きになる。横山八十三騎の面々も千鳥掛けに列ならばれる。

酒宴は一献、二献、三献…五献と進んだが、小栗殿は「私は今日は、来の宮の神に誓って精進し、酒を断っております」と申されて、杯のやりとりは一切応じるけはいがない。横山殿はこれをご覧になって、その場に仁王立ちになり、（内心）小栗のやつめ、馬で殺

そうとすれども殺せず、また酒で殺そうとしても、酒を飲まねば仕方がない。どうしたらよからうかと思案なさるが、その時「そうだ、こうしてみたらどうでしょう」と、殻の法螺貝を一对取り出して、碁盤の上にどんと置き、「ご覧あれ小栗殿、武蔵と相模は車の両輪のようですが、その両国をこの貝に入れて、半分ずつ頂くこととしましょう。これを肴に一献召し上がれ。今日の来の宮信仰酒断酒は、私がかわりに罰をこうむります」と、立って舞を一番舞った。小栗はこれを聞いて、れっきとした侍が自分に所領を添えて賜る以上は、なんらさしつかえもあるまいと思ひ、一杯たつぷりと飲んで、杯を手もとに置かれると、下座の者にも酒が次々と行き渡った。

横山殿はこれを見て、うまくつけ込む好機とばかり、両口鉚子を用意した。その中に別々の酒を入れ、横山八十三人衆の酒は、初めの酒の酔い醒ましの不老不死の薬酒、小栗十一人に盛る酒は、なにしろ鳥甲入りの毒酒ということで、この酒を飲むが早いかな、毒はたちまち十一人の体に回る。九万九千の髪の毛穴も、四十二対の腰骨も、八十対の関節までもが全て、離れてゆけとばかり必み渡る。ああ天井も大床も、ひらりくるりと眩うばかり。(小栗の従者は)「これは毒酒ではあるまいか? お覚悟なさいまし小栗殿、君の奉公これまで」と、これを最後の言葉として、後ろの屏風の方へどうと倒れる者あり、前へがばとうつ臥す者あり、小栗殿の左右の侍たちは、さながら将棋倒しの如く次々と倒れた。さすがに小栗殿は、やはり大將だけのことはある。刀の柄に手をかけて、「のう、横山殿よ、憎つくき武士どもを、太刀を用いず、詰めよって腹を切らすことなく、毒殺しようというのか横山よ。女がやるような所業をなさるな、いざ来たれ、差し違えて死のうぞ」

と、抜こう、立とう、組もうとはしてはみるものの、心ばかりは「高砂の松」のように高ぶり、「松の緑」の縁でいざ見参と奮い立つが、次第に毒が身体中に回って、五体が遊離し、吸う息も屋棟を伝う小さな蜘蛛の吐く細い糸のよう。そして冥土へと引く息くは、三つ羽の征矢<sup>そや</sup>よりも速くみえる。冥土の息が強くなつて、悔しいかな弱冠、惜しまるべき男盛り、御歳、小栗二十一を一生に、朝<sup>あした</sup>の露と相成った。

(つづく)